

地域住民とともに考えるやきものの里の サインについて

栗田融¹・山下三平²・河地知木³・丸谷耕太⁴・内山忠⁵・稲上誠⁶・土屋潤⁷

¹ 非会員 博士（芸術工学） 九州産業大学芸術学部デザイン学科（〒813-8503 福岡市東区松香台二丁目、E-mail:kurita@ip.kyusan-u.ac.jp）

² 正会員 博士（工学） 九州産業大学工学部都市基盤デザイン工学科（〒813-8503 福岡市東区松香台二丁目、E-mail:samp@ip.kyusan-u.ac.jp）

³ 非会員 九州産業大学芸術学部デザイン学科（〒813-8503 福岡市東区松香台二丁目、E-mail:kawachi@ip.kyusan-u.ac.jp）

⁴ 非会員 博士（工学） 立教大学観光学部観光学科（〒352-8558 埼玉県新座市北野一丁目、E-mail:maruya@rikkyo.ac.jp）

⁵ 正会員 博士（工学） 九州産業大学景観研究センター（〒813-8503 福岡市東区松香台二丁目、E-mail:u.tadasi@ip.kyusan-u.ac.jp）

⁶ 非会員 博士（学術） 九州産業大学景観研究センター（〒813-8503 福岡市東区松香台二丁目、E-mail:inagami@ip.kyusan-u.ac.jp）

⁷ 非会員 博士（工学） 九州産業大学景観研究センター（〒813-8503 福岡市東区松香台二丁目、E-mail:a.jun@ip.kyusan-u.ac.jp）

屋外に設置されるサインは、景観を構成する要素の一つであり、当該地域のイメージに大きく影響するものである。地域住民とともにやきものの里のサインを考えるワークショップ（グループワークや現地での実験）を通じて誘導サインについて検討したところ、誘導する目的によって目的地名称以外の情報を追加する必要があることがわかった。しかし、誘導サインにそれらの情報を全て記載すると、誘導の効率が低下する恐れや過剰なデザインになる可能性があるため、案内サイン・位置サインやマップ等と情報を連係させ、包括的な案内システムを構築することが有効であると考えられる。

キーワード: サインデザイン、サインシステム、住民参加、地域景観

1. はじめに

我々が、初めて訪れた場所で必要とするものの一つにサインがある。ここで言うサインとは、人々の行動の拠り所となる情報を具体的な形で表したものの¹⁾の中でも、当該地域に不案内な来訪者に対して、地域の情報や目的地までの道順、当該施設に関する情報などを提供する情報提供媒体²⁾としての案内標識³⁾である。また、屋外に設置されるサインは、景観を構成する要素の一つであり、地域のイメージに大きく影響するものでもある²⁾。

現在、筆者らは、福岡県朝倉郡東峰村のサインのあり方を地域住民とともに考える試みを行っている。東峰村は、平成17年に旧小石原村と旧宝珠山村が合併して発足した自治体で、福岡県中央部の東端に位置する中山間地域であり（図-1）、小石原地区に多くの小石原焼と高取焼の窯元を抱えるやきものの里でもある。窯業という生業と自然との相互作用を通して特有の文化的景観が形

成されてきた⁴⁾ことを考慮し、地域住民が考える小石原らしさを踏まえサインのあり方を検討している。山下が全体のマネジメントおよびファシリテーション、栗田がデザイン面のマネジメント、河地がサインデザインの監修、丸谷・内山・稲上・土屋がワークショップの運営および調査・分析を担当している。

これまで“小石原看板サインデザインワークショップ”を筆者らが主催し、地域住民とともに4回実施した。また、各ワークショップの合間にも情報交換や意見交換ができるよう有志を募り、“世話人会”を立ち上げた。これらの活動では、当該地域のサインの現状と住民の考える地域らしさの把握を行ったうえで、必要となるサインの中から“誘導サイン”を例にした“恒設サイン”のデザインと、イベント時の演出を兼ねた“仮設サイン”のデザインの検討を、グループワークや現地での実験により行った。そこで本論では、その取り組みの途中経過を報告し、今後の課題を抽出する。

2. 恒設サインの検討

(1) 第1回小石原看板サインデザインワークショップ

平成 25 年 7 月 30 日，東峰村小石原鼓“喜楽来館”において“第 1 回小石原看板サインデザインワークショップ”を実施した（図-2）。参加者は，窯元関係者 14 名，飲食業関係者 2 名，東峰村役場関係者 2 名の計 18 名であった。

初めてのワークショップということで，まずは現状把握を行った。最初に，地域のサインのあり方に関する参加住民の率直な意見をアンケートを用いて収集した。次に，東峰村合併後のサイン計画の現状について役場からの説明を聞き，その後小石原地区のサインの現状をスライドを見ながら共有した。最後に，地域のサインのあり方に対する意見交換を座談会形式で行った。

主な意見をまとめると，現状の認識が不足していた（サインの数の多さや不整合な情報等），周辺環境との調和を考えたうえで内容が伝わりやすいサインがよい，地域らしさが伝わるサインがよい（自然豊かな環境，やきものの里），混在した情報を整理し統一されたマップとサインが必要であるとの意見が挙げられた。

(2) 第2回小石原看板サインデザインワークショップ

平成 25 年 8 月 20 日，東峰村小石原鼓“喜楽来館”において“第 2 回小石原看板サインデザインワークショップ”を実施した（図-3）。参加者は，窯元関係者 8 名，飲食業関係者 1 名，東峰村役場・議会関係者 3 名の計 12 名であった。

参加者同士がより深く意見交換できるよう 3 つのグループに分かれ，小石原らしさを探ることを目的に以下の 3 項目について話し合った。

- ・小石原に特徴的なモノ・コトや人を描く
- ・小石原らしさを漢字 1 文字で表し、その色を選ぶ
- ・小石原らしい書体を選ぶ

話し合った結果を模造紙にまとめ，グループごとに発表した。他グループの内容を共有した後，全体で再評価した結果を以下に示す。小石原に特徴的なモノ・コトは，“シャクナゲ，星，蛍などの自然要素”“人柄”“登り窯，唐臼などの焼き物関連”などが挙げられた。小石原らしさを漢字 1 文字で表すと“郷、癒、伝、白、輝、炎、技、陶、涼、薫など”であり，その色は“うすいピンク，濃い緑，濃い青，赤，黄，白，濃いオレンジなど”であった。小石原らしい書体については，“丸ゴシック，隷書体，行書体など”イメージはさまざまであった。

(3) 世話人会

2 回のワークショップを通じて参加者から，具体的な



図-1 東峰村の位置図



図-2 第1回ワークショップの様子



図-3 第2回ワークショップの様子

形が見られれば，よい悪いといった考えを述べたり質問をしやすいという意見が挙げられた。そこで，これまでのワークショップの結果をもとに仮のサイン案を検討し“世話人会”で提示した。

具体的な形を検討するにあたって，東峰村のサインシステムで考えられるアイテムを整理した（図-4）。ただし，地域住民とサインのあり方を検討するには，サインシステム全体から議論をしていくことは現実的ではない。専門家でない住民が体系的にサインを捉えることは，これまでのワークショップから難しいと判断した。そこで，分岐点等に設置される“誘導サイン”を例に検討することとし，2回のワークショップから導き出された内容を

反映させ、誘導サインの仮案を作成した（図-5）。

提案したポイントは，“地域らしさを伝える素材として小石原で特注制作した陶板を用いる”ことと，“地域らしさを表す色彩を用いた情報の整理”（例えば、公共性の高い施設は濃い青、名所・旧跡などの観光資源は濃い緑、やきもの関連はオレンジを使用するなど）である。

提示した仮案に対し、窯元関係者から陶板の使用は避けたいとの意見が挙がった。冬の厳寒期に小石原焼の特徴である表面の貫入に入り込んだ水分が凍り、割れが生じてしまうという理由からである。以前、屋外看板に使用して失敗した経験からの意見であった。色彩を用いる

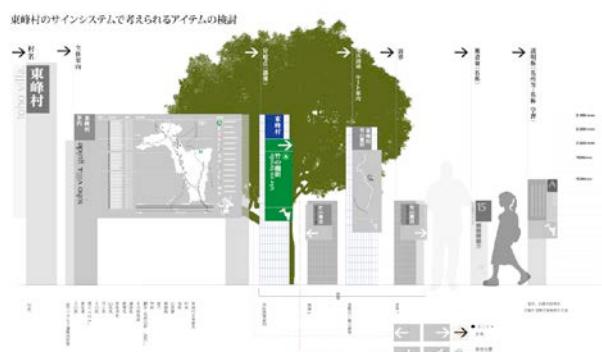


図-4 東峰村のサインアイテムの検討

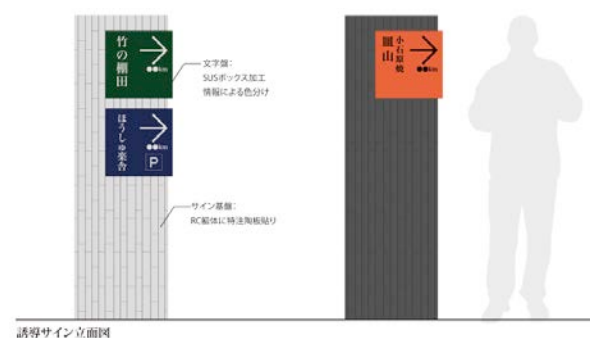


図-5 東峰村の誘導サインの検討



図-6 第3回ワークショップの様子

方法については、概ね理解された。今後は、陶板以外の素材や、色彩の使用範囲やルール化が検討対象となると考えられる。

(4) 第3回小石原看板サインデザインワークショップ

平成26年1月29日、東峰村小石原鼓“喜楽来館”において“第3回小石原看板サインデザインワークショップ”を実施した（図-6）。参加者は、窯元関係者8名、飲食業関係者1名、東峰村役場関係者3名の計12名であった。

2. (3)を受け、より具体的な案を地域住民と検討するにあたり、小石原と同様に陶器の産地である愛知県常滑のサイン事例を紹介した。常滑では“やきもの散歩道”としてAコース、Bコースの2つのルートを設定し、手持ちマップと連動させたサインを計画的に設置している。

事例を参考に、“誘導サイン”の検討を進めるにあたり、メインとなる国道から800mほど離れた位置に窯元が密集する皿山地区への誘導を目的とするサインを考えていくこととし、以下の3項目について意見を出し合った。

- ・誘導サインの配置
- ・誘導サインに入れる文字情報
- ・マップなど、その他に入れた方がよい情報

サインの配置については、国道211号線からの入り口にあたる“道の駅の前”と、もう一方にあたる国道500号線の“行者杉の入り口”のほか、当該地区までの分岐点が有効であるという意見が挙がった。サインに入れる文字情報としては、“皿山”という地名のほか、“発祥の地”“小石原焼・高取焼”“民陶の里”“焼き物の里”など窯元があることを知らせる情報や英語表記が必要であるという意見が挙がった。その他に必要なと思われる情報としては、“矢印や距離”“マップ”のほか、“イメージを伝えるイラストやピクト”“QRコード”“窯元の名称”といった意見が挙がった。その他の意見として、来訪者が立ち寄る要所への全体案内図の整備、窯元番号の整理、サインに使用する村全体で統一した色彩の計画、行者杉や唐臼などの観光資源の案内、観光資源の整備などが必要であるとの意見が挙がった。

(5) 第4回小石原看板サインデザインワークショップ

平成26年3月11日、東峰村小石原“道の駅小石原”に集合して“第4回小石原看板サインデザインワークショップ”を実施した（図-7）。参加者は、窯元関係者8名、飲食業関係者1名の計9名であった。

2. (4)を受け、誘導サインの実寸模型を現地に仮置きして視認する実験を行った。木材を加工して制作した幅800ミリ・高さ2400ミリのサイン板、様々な大きさの文字・矢印・距離数字・地図・窯元名称を印刷した紙と画

紙を準備し、設置に有効だと挙げられた中の3エリア（図-8）で設置場所および文字情報等の板面内での配置や大きさを変えながら検証を行った。

設置場所について，“道の駅の前”の国道沿いは他のサインが多いため、皿山地区へ向かう道の入り口付近左側に国道と平行して設置する方法が有効であることがわかった。“グランド横のT字路”では、複数の施設案内がばらばらに並べられているため、すべてをまとめて設置した方が有効であることがわかった。“小石原焼伝統産業会館と皿山地区とに分岐するY字路”では、複数のサインをまとめて分岐点に設置する方法が有効であることがわかった。

必要な情報については，“皿山”“SARAYAMA”“やきものの里”“矢印”“距離表示”が挙げられ、文字の大きさについては、大きな文字は幅220ミリ以上、矢印は長さ300ミリ程度は必要であるとの意見が挙がった。また、今回の実験では白地に黒文字のみで行ったため、他の色がある方がよいのではないかとの意見も挙がった。

3. 仮設サインの検討

(1) イベント時の仮設サインの検討

多くの窯元を抱える小石原では、春と秋に“民陶むら祭”が開催され多くの観光客を迎える。やきものの里としての小石原の特徴は、窯元の数が多いことと、窯元が立地する範囲が広いことである。そのことにより、初めて訪れる観光客にとってはイベントの対象エリアが把握しづらく、主催者側はまとまりをもった演出がしづらいという課題を抱えている。

そこで、観光客を対象エリアへ誘導する目的とイベントの演出を兼ね、会期中に限った方法としてバルーンを用いた仮設サインを提案した。使用するバルーンの大きさと色については、大学構内で事前に実験を重ねた結果を踏まえて提案した。誘導を兼ね沿道に連続して設置するバルーンは直径約50センチとし、各窯元を示すバルーンは一つでもアピールできる大きさである直径約75センチとした。バルーンの色は、小石原の風景を構成する樹木や建物を背景にしたときに最も映え、さらに焼き物を連想させると2. (2)で挙げられたオレンジとした。

(2) イベント時の仮設サインの実施

3. (1)の提案に対し、一部の窯元から試験的にやりたいという意向が示された。そこで、平成25年10月12日から14日までの秋の“民陶むら祭”において、15軒の窯元有志によりバルーンサインの実施を試みた。

参加した窯元はいずれも地域のメイン動線である国道から入り込んだ立地であったため、国道から窯元までの



図-7 第4回ワークショップの様子



図-8 実寸模型を設置した場所（赤○で示す）

沿道に直径約50センチのバルーンを約20メートル置きと道の変換点など視覚的に連続する位置へ設置した。さらに、直径約75センチのバルーンを各窯元に1つずつ設置した。当日は、各窯元がイベント準備を開始する前の早朝6時に集合し、役割を分担して設置作業にあたった（図-9）。初めての試みで最初は慣れない作業に時間もかかったが、参加者は普段ものづくりをしているためか飲み込みが早く、1時間30分程度で作業は完了した。

(3) イベント時の仮設サインへの評価

イベントの会期中は天候に恵まれ、オレンジのバルーンが青空に浮かぶ光景は美しく感じられた。バルーンは、窯元を巡る観光客や車の頭を超えて浮遊しているため視認しやすく、道標としての役割とイベントの特別感を演出する効果が得られていたようだ（図-10、図-11）。

会期終了後に、参加者へアンケート調査を行った結果を以下に示す。男性9名、女性10名の計19名から回答が得られた。回答者の年齢は、30代2名、40代11名、50代6名であった。

バルーンサインを設置した感想は、非常に満足と満足を含わせて69%、どちらでもないが26%、不満が5%

であった。来訪者の反応は、非常に効果があったと効果があつたを合わせて 37%, どちらでもないが 32%, 効果はあまりなかったと効果はなかったを合わせて 31% であった。イベント時のバルーンサインの継続については、是非続けたいが 47%, 続けたいが 21%, 今回だけでよいが 21%, 無回答が 11% であった。記述式で挙が



図-9 仮設のバルーンサインの設置準備の様子



図-10 仮設のバルーンサインを沿道に設置した様子



図-11 仮設のバルーンサインを窯元に設置した様子

ったよかった点は、今までと違う取り組みをすることで様々な考え方を知る機会になった、改めて小石原の事が考えられた、祭り気分やイベント感が出た、案内が簡素化された、誘導効果があつた、当事者が楽しめたなどがあつた。記述式で挙がった課題点は、当事者たちの考え方の違い、天候に影響を受けやすい方法（バルーンの割れや揺れ）、バルーンが割れた時の音が来訪者に与える影響、バルーンが電線と干渉するなど設置場所、早朝準備の負担などがあつた。自由記述欄では、今まで知らなかった小石原を再発見してファンになられたお客様がいた、村全体に広がり活性化に繋がっていくといいという前向きな意見がある一方、来訪者の反応を耳にしなかったため効果があつたか不明、見直す必要があるといった少数意見が挙がった。

4. 考察

(1) 恒設サインについて

4 回のワークショップを通じて、来訪者に対するホスピタリティを上げようという意識が参加者に高いと感じられた。これは、参加者が窯元や飲食業関係者であり来訪者を相手に生業を営んでいることに起因するだろうが、問題意識が参加者以外の住民にも広がれば、村全体の良好な環境づくりへ繋がる可能性を持つと考えられる。

参加者の立場や嗜好により違った考えを持つことは、ごく当たり前のことである。ただし、2. (1) で挙がった“地域らしさ”に対する意見や 2. (2) で探求した“小石原らしさ”では、“自然豊かな環境”や“やきもの関連”といった考えに集約された。これは、小石原地区に限った特徴として捉えるだけでなく、農業を主な生業としてきた宝珠山地区にも拡大し、“東峰村らしさ”として捉え得るものと考えられる。また 2. (3) や 2. (4) から、個別の具体的な検討を行うことで、参加者の思考が判然としやすく、全体を引いて見る思考も生まれやすいことが認められた。

今後の課題としては、地域らしさを伝える素材の検討、素材以外で地域らしさを伝える方法の検討、ワークショップへの参加者の拡大、行政との更なる連携、村全体のサインシステムの構築が考えられる。

(2) 仮設サインについて

訪れた地を気持ちよく感じる要因の一つに、そこに住む人が気持ちよく暮らしているということがある。同様に、訪れたイベントで充実した時間を過ごすには、イベントを運営している側が楽しんでいることが重要だと考えられる。

3. では、“民陶むら祭”というイベントへの来訪者を

窯元まで誘導する目的と、イベント自体を盛り上げる演出をするために仮設のバルーンサインを一定地域に設置した。バルーンが割れるなどいくつかの課題は挙げたが、当初目的である来訪者の誘導効果とイベントの演出効果は、少なからず認められた。さらに、この試験的な取り組みで得られた“多くの当事者が楽しかった”という結果は、予想を超えた成果であったと考えられる。当事者の楽しさは来訪者へと自然と伝わり、イベント全体の空気感を高揚させる効果に繋がったと考えられる。

今後の課題は、取り組みの継続、継続する場合の仕様の見直し、取り組み範囲の拡大と目的の共有化、運営経費の計画と運用管理、行政との連携などが考えられる。

5. おわりに

その後、平成26年5月3日と4日（民陶むら祭の1日目と2日目）に、2.と3.で検証した内容を反映させた“誘導サイン（看板、バルーン）”を現地に仮設置し（図-12、13、14）、皿山地区を訪れた人を対象にヒアリング形式でアンケート調査を実施した⁵⁾。2日間で得られた回答数は214件、回答率（引き受けた人数／依頼した人数）は56.6%であった⁵⁾。仮設置したサインの誘導効果およびデザインの評価の結果から、有効性について検証した⁵⁾。看板に関しては、15%の人が「役に立った」と答え、デザインの評価は全体的に高かった⁵⁾。しかし、「情報が足りない」「皿山の意味を知らない」という課題が明らかになった⁵⁾。バルーンに関しては、30%の人から「役に立った」という回答が得られ、デザインの評価も概ね良好であった⁵⁾。その一方、「案内用と認識されにくい」という課題が明らかになった⁵⁾。

この調査では、“誘導サイン”のみを設置することにより、ある程度の効果を認めることができた。しかし、それ以上の効果を生み出すためには、明らかになった上記の課題を改善する必要がある。どこへどのように誘導するのか、その目的によって目的地名称以外の情報を誘導サインに追加する必要があることがわかった。しかし、それらの情報を全て記載すると、誘導の効率が低下する恐れや過剰なデザインのサインになる可能性がある。したがって、案内サイン・位置サインやマップ等と情報を連係させることにより、包括的な案内システムを構築することが有効であると考えられる。次回のワークショップからは、東峰村全体の効果的なマップの検討を行って行く予定である。

謝辞：本研究は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「北部九州の窯業に着目した文化的景観の形成と保全に関する研究」（No. S1203007）の助成を受けて実

施された。プロジェクトに参加していただいた東峰村の住民の方々へも含め、ここに記して感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 竹内誠：日本の時代背景とサインデザインの変遷，BIOCITY, 55号, pp. 7-17, 2013
- 2) 福永香織：サイン整備を通じた地域のイメージづくり，観光地経営の視点と実践，丸善出版, pp. 172-179, 2013
- 3) 国土交通省：観光活性化標識ガイドライン，15pp, 2005
- 4) 丸谷耕太，山下三平，内山忠，小川勇樹：小石原焼の里における作陶に関わる文化的景観の変容に関する研究，都市計画論文集，49(1), pp. 83-92, 2014
- 5) 稲上誠，山下三平，内山忠，豊岡広平，土屋潤，栗田融，河地知木：小石原民陶むら祭における仮設誘導サインの有効性の調査，第16回日本感性工学会大会発表論文集，File No. C22, 2014

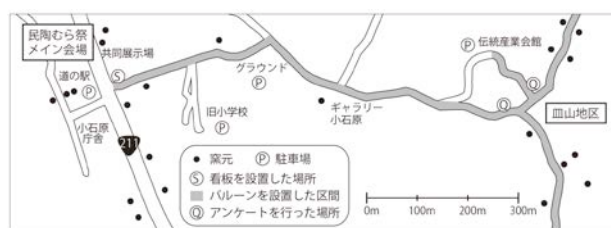


図-12 誘導サイン（看板、バルーン）の配置⁵⁾



図-13 設置した看板の様子⁵⁾



図-14 設置したバルーンの様子⁵⁾